

令和6年度第4回天理市総合教育会議会議録

1、開会年月日 令和6年10月22日（火）

2、閉会年月日 令和6年10月22日（火）

3、出席委員氏名

並河 健	伊勢 和彦	吉田 義和
西田 伊作	西畑 敦司	末浪 真希

4、委員及び傍聴人を除くほか議場に出席した者の氏名

副市長	藤田 俊史
市長公室長	上田 茂治
事務局長	奥村 紀一
教育次長	山口 忠幸
教育総務課長	前山 紘昭
まなび推進課長	藪内 善史
教育総合センター所長	綿谷 圭介
教育総合センター主幹	中尾 俊夫
こども未来課長	河合 宏明

5、会議に付した案件

- 1 次期教育大綱について
- 2 今後のスケジュールについて

6、会議の経過議題

開会	午後4時30分
終了	午後5時37分

開会 午後4時30分

1. 教育総務課長

時間となりましたので、第4回天理市総合教育会議を開催させていただきます。まず、市長よりご挨拶をいただきます。お願いします。

1. 市長

第4回目の総合教育会議ということでございましたけれども、前回までに、子どもたちを取り巻く状況についてどう捉えるか、またどういった力を育んでいきたいか、本当に教育委員会、また私どもとしても今、ほっとステーションを通じて、これから色々な案件で実例がどんどん上がってきているような状態なので、大分、地に足のついた議論が今年はあるのではないかなというふうに思いますが、今までの議論のその内容をまとめたものというは無いのですね。

1. まなび推進課長

ちょっと今日中に準備できないですね。

1. 市長

すいません。ちょっと冒頭の挨拶と言いながら、今日の議題は、何をしっかりと皆さんにお話していただこうと。

1. まなび推進課長

教育大綱のA4の横の部分とアクションプランのこの2件になります。

1. 市長

これは今までの議論が基本的には全て反映されているという認識でよろしいですか。

1. まなび推進課長

はい。

1. 市長

であるならば、それに基づいていきますけども、あまりこのアクションプランというよりも、こっちの方をしっかりと。あと何回あるのですたっけ。

1. まなび推進課長

次の会議は、2月の予定になっています。

1. 市長

それで全部締めくくらないといけないわけですね。はい。ちょっと難しいかなと思いますが。

1. 教育総務課長

12月にパブリックコメントの方を想定しておりまして、12月1日から月末にかけて、公にたたき案を示していきたいと考えております。

その上で、本日の会議で一定のところまでまとめていきたいというのも目標としておいているのですが、これでまとまらない場合は来月にでも再度ちょっと会議を開催して、12月のパブリックコメントのたたき案を策定するまでは進めていかなければいけないというふうに考えております。

1. 市長

すいません、私が若干違和感を示してるのが、このアクションプランの部分の、今まで話してきた内容というのは教育の本丸の部分ですよね。つまり、その個々の先生方が授業でしたり、あるいはその集団の今までのその教育についてどのような視点を重視してやっていくかということ、しっかり我々が今問い直さないといけないということで、合田次長さんの資料を見ながら議論してきたわけなのですが、ここにある内容っていうのはどちらかというと周辺部分ばかり。その授業そのものをどうしていくとか、そういう乗っけから、そのコミュニティスクールだとか学校三部制だとか、地域と一体とか、こういうのはプラスアルファで出てくる部分ではあるけれども、そもそもの学校生活そのものでしたりとか、どういうところを重視してやっていくのだということ、今まで議論してきたはずなので、まずここをしっかりと議論できたら。この表については、まず説明をしてもらったらいいいのですか。

1. 教育総合センター主幹

失礼します。まず、資料の方をご覧ください。まず、社会に出るときに身につけたい力という行のところで、真ん中の部分が、しなやかな生き方。これが社会に出る時に身につけたい力の中心に据えさせていただいております。いろいろ議論していく中で、今まで作られてきた教育の中で社会に出る時に付けていきたい力というのは、強靱な、折れない、揺るぎないといったような力だったかもしれませんが、やはりそういった力というのは大きな衝撃には弱く、

逆に折れてしまうというところがありますので、本当につけたい力は、違和感に対応できるような、しなやかさっていうものを掲げたらどうかという議論になりました。そのしなやかな生き方とリンクしてくるのがレジリエンスという言葉です。

忍耐力とかしなやかな心とかいろいろな訳がございますけれども、そのしなやかな心が、レジリエンスの構成要素、いわゆるレジリエンス研究はまだまだ発展途上で、確定的な要素というのは見つかっていませんけれども、その中でも謳われているものが、今教育の中で必要なと思うもの4つを挙げさせていただきます。

まず黄色いところ、自己肯定感、自己優越感、そして青いところのコミュニケーション力、そして左下の楽観性や計画性、そして右下のSOSを出せる力、サポートしてもらう力。この丸の部分については、その具体的に、こんなことをしてはどうでしょうという指標を掲げさせていただきます。

めくっていただきまして、この四つの力を具体的に今の事例に当てはめて、こんなことをしたらこんな力がつくけど、こんなことをするとこんな力がつかないではないでしょうかという提案の事例集になっております。まず①をご覧くださいますと、周囲と同じペースで課題が進まない子がいます。

そういった時に今、ご提案をさせてもらいたいのは、自分のペースで課題に取り組んだことを褒めてあげる。そうすると自己肯定感が高まり、SOSを出せる力も付けれるかもしれません。そして、計画的にその物事を進めるということも考えていけるかもしれません。

それに反して、そういった関わりは、力をつけないのではないかとこのころで、ペースが遅い子とか、課題を最後まで出来ていない子等を励ます。励ますということは、今までにもそういうことがされてるかもしれませんけれども、ペースが遅いから、早く頑張ろうとか、課題を最後まで頑張ろうね。というような声掛けというのは、実は、基準を作ってしまうと、右側に大きな四角がございます。

こちらの方が心理士やスーパーバイザーも含めたコメントを書かせていただいております。「集団を基準に課題を達成させることにこだわると、自己肯定感を下げってしまうかもしれません。個々に応じてほめを意識した声かけや、工夫が必要です。」というふうにコメントをさせていただきます。

ちょっと全部は量が多いので、③番、順番を待てず、落ち着きがなくうろろろする子がいます。そういった時に、ある程度動くことを許容し、自分から戻る過程を見守っていくというこんな姿勢が大事なのではないのでしょうか。

例えば、今はじっとして順番を待つように注意し、うろつかないか監視する。これは色んな教育現場でもよくやっていることかもしれません。

右側の四角をご覧ください。じっとしてられない子は、動くことで落ち着きを取り戻そうとします。

これは石井先生の講義でもございましたが、動いていくことで落ち着きにつながっていくという発想です。発達の特徴が強い子には声かけを工夫して寛容な姿勢で見守ることが二次障害を防いでいくという考え方です。

次に、すこし飛びますけれども、⑩番です。ここまでちょっと見ていただけますでしょうか。例えば、これ、最近あった事例をもとに新しく組み込んだことですが、不注意によってみんなと同じことが出来ずよく叱られるとあります。

元々、不注意だということが分かっている場合であると、不注意の特性を十分に理解してあげて、失敗が少なくなるようにサポートすることが大切かと思えます。逆に、毎回そこはできていないよと不注意な部分を本人に確認して注意し続けていく。これは実際の現場でも確かにやられていることかもしれません。

右側のコメントも読ませてもらいましたが、不注意によって失敗を繰り返してしまう子は、先生からの毎回の注意や叱りによって、その行動を改善されるものではありません。先生が特性を理解して、何をどうすればよいかを一緒に考えて、できた良い行動を褒めていくことが大切です。実際不注意を、注意され続けることで、現場では無気力な状態を起こしていくことがあります。無気力を改善していくためには、やっぱり褒めていくことしかありませんので、それ以前から褒めていくということが大切だと考えております。といったようなものをずっと並べさせていただいております。以上となります。

1. 市長

はい。これはどちらかというと、ほっとステーションに対する相談であったりとか、最近はこちらから学校のSOSに応じて、出向いていたり、あるいは様子を見た時に、落ち着いてないとか、ちょっとクラスがギスギスしてる、みたいなことがあった時に飛び込みに行っているんですけども。従来、先生方の視点で、当たり前でまだやっていたことが実は子どもたちにとつたら、ここに付けたら四つの力みたいなのを阻害要因になってしまっているような部分が結構あって、それについてきちんとみんな認識を合わせていこうという、こういうことでしたかね。

ある小学校であった事例は、ひたすら板書をする先生がいてですね。それをしっかり写経のように写すことが重要だみたいな、やれてる子もいる。やれてる子が評価の対象になる。それを全くやれてない子がいたら、全く何も書いてなかった子に対して弛んでるというような言い方をしてしまったと。そしたら、

にらみ返してきたっていうことは、そもそも、一方的に情報をインプットして、それをとにかく書き写してみたいな。ペースもそれぞれいろんな子がいる中で、ちょっとそういう昭和的なスタイルが合っていないんじゃないのとか。

あるいは直近であったので言うと、ずっと口を手を持って行ってしまってる子がいて何でなんだろうっていうことの相談があったんですけど、実際に行ってみたら周りの子よりもペースが遅くなってしまった時に、ちょっと不安だったりイラだったり、焦った時に手を入れちゃってるのかなと。

だけれども、自分なりに出来て提出して、それが認められた時は落ち着いてるっていう。今まで先生は、口の中に手を入れてしまっている部分をやめなさいということに集中してるところがあったと。

だから、そんな手でプリント触って他の子に渡したらあかんやないのとかじゃなくて、そのよっしゃと言って落ち着けてる瞬間の方にもっと目を向けられるようになる。だから、それぞれの子どもがどういう時に安心したりとか、あるいは、自分が肯定されたかっていうようなところの状態に、もっと目を向けられるようになる必要があって、その今までだったらその集団としてのルールを守ってる。

今やらないといけない行動がちゃんとできてるかどうか、あるいはそれをできてないと見なされた時にそれを注意するっていう、そっちの整える方に、精力を注ぎがちだった部分の視点をちゃんと変えていこうと。その視点を替えるために具体例をいろいろ出す中で、実は悪気があってやってるわけじゃないけれども、それっていうのがそれぞれバツだったり三角だったりつけてますけども、こういうことになってしまうっていうところをもっと見つめていこうね。

これをちゃんと問うていくっていうのが、今回の大綱の一番大きな要素という認識でよろしいですか。

1. 教育長

はい、まさしくその通りなんです。一つ、これをまとめたのを見てて分かったのは、集団生活をする学校であるがゆえに、集団で授業を進めていく学校であるがゆえに、個々の子どものそういう特性や違いを踏みにじるような指導をしてしまっている。

しっかりみんなが落ち着いて勉強するために厳しい注意をする。学習のみんなが効率を上げるために、誰かがターゲットになってしまったりする。だからこそ、集団でどんな力をつけるのかを見失ったらいけません。こうやって集団で勉強したり、集団で頑張ってる、学校生活を送るときにそこを目指しているのは、しなやかに生きていく個々の力なんだよということを、どの先生にも、それはこういう問題からしたらこういう力なんだよということを分かってもら

ったら、絶対集団指導はしないといけないけど、集団指導でその根本的な軍隊的な形式的な指導はしないで、違う指導の集団作りをしてもらえるんじゃないかと。

1. 市長

だから、個々を大切にしながら調整しつつ、こういった力を養っていくにはどうしたらいいのかっていうところにもっと視点を向けていこうと。それがないと、今、運動会シーズンで、ずっと回ってきましたけど、幼稚園だったり保育所でもね、整列させることに一生懸命になっちゃってるみたいなの。

大体今までのお話を聞いてると、小学校に上がった時に集団生活に馴染めないとダメだから、今この時にちゃんとそういうことをやれるようにしてあげとかなないとダメだみたいなの。そういう形になってしまっていて。だから、これは就学前も含めて何を本市として大切にすることのかっていうところをちゃんと整理をしないといけない。

こういう会議、副市長もちょっと問いたいんだけど、この会を重ねてやってくる場合は、基本的に1回目、2回目で皆さんがどういう議論をしていただいたのかってことがちゃんとまとまっててさ。それで、その積み上げの中に今の部分がどういう形で大綱の文章として反映されるのか。それが不十分なところがあったらどうなのかっていうことを議論するってのが大体普通の第何回会議なんじゃないの。

その今も出てきてるけど、その大綱がどういう形で作られるのかっていうのがさっぱり見えないじゃん。せっかく今年に関しては、1回目の時にまず子どもたちを取り巻く状況、社会の変化っていうのはどういうことなんだということをお話だけ議論をしていただいた。

その高度成長期みたいなの、画一的に育てていったりとか、そこのルールをきちんとこなせるだとか、あるいはそのできている側に、できている側という風に扱われていた子ども、一つの尺度だけでやってしまうと、実はある時に障害にぶつかった時に、失敗から立ち直れる力が弱くなっちゃうんじゃないかと。こういうところもいっぱい議論をして、こういう力をつけましょう、こういう力をつけましょうって言って、だいたいやって、もちろんここに書いてある四はそれとズレてはないんだけど、その前回までの議論がどう大綱の文章に反映されていくんだっていうのが全くないからさ。

何をどう議論しようとしてるわけこの会議で。

1. 教育長

確かにそうなんですけど、このメンバー、前回からああでもないこうでもな

いって出てもらっているのです、大体、目指すところは何なのかっていう論議は。

1. 市長

後でちゃんと反映されて、その何か大綱になって出ていくわけですね。

1. まなび推進課長

はい。今の議論の中のものが、今こういう形でまとまってきているということです。

1. 市長

だいがまとまりすぎだつて。いや、だからここにいるメンバーはわかるけど。でも学校のこれから先生方だったり保護者だったり、パブリックコメントで示していくわけじゃないですか。その時に、一体この総合教育会議のメンバーが、世の中がなっていると。こんな風に世の中動いてきてる。だから子どもたちにこんな力をつけさせていかないといけないって、相当議論をやったわけなんだけれども。

いきなりここまでパンと飛んだ時にわかるの意味。流れが、要は、いや集団の行動ってのが大事でしょ。きちんとルールを守ってビシッとみんなで行進して、これをやってたらやっぱりすごいじゃんと得るものもいっぱいあるじゃんっていう風に思う人もたくさんまだいる中で、ただ、それだけではやっぱり今目指している像と違う、というようなことをだいが噛み砕いてこの場で議論してたわけだから。

だから、この場の皆さんはいいっていうのは分かりました。だけれども、それを大綱という形で世の中に出していくためには、ちゃんとその流れに沿って出てこないか、なぜこういうところに至ったのか、なぜこれができたか経緯がわからない。唐突に示されても。だからそれは国が出すどんなものでも、大体、世の中は今こうになってます。我々が抱えている課題はこうです。だからこういう風にしなければいけない要素があります。そこまで言って、で具体的な重要施策みたいな、大体こういう順番で来るでしょ。

だからちゃんとそういう編成に、今までのその議論の何というか、要旨はあるんでしょから、ちゃんとまとめて、全体の中にこれを盛り込んでいく。

そこはじゃあ、また今日はちょっと作るのに間に合わなかったってこと。

1. まなび推進課長

はい。

1. 市長

わかりました。

1. 教育長

この社会に出る時に、三鷹市のことで、VUCAと言ってたじゃないですか。社会に出る時にどんな力を付けたいか。これからの先が見えないとか、VUCAという言葉で表してたけど、そんな社会に出る時に身につけたい力はなんだっていう。今までの高度成長期みたいな右肩上がりの過去のことをそのままどんどんやっていったら通用する時代じゃなくて、いわゆるパンデミックやあるいは、戦争であったり、あの病原菌であったり、あるいは、人口減少であったりですね、そういう先が見えない災害も含めて、そういう時代にこそ必要な力、社会に出てくとき。その時に自分らしく、あるいは自分の幸せだけを考えるんじゃないくて、人と一緒に力を合わせて豊かに生きていく。そういう力が必要だということを謳った方がいいのじゃないかなって。

今までやってるのは粛々と、これから先の社会も前と同じやという中で、150年の財産の中でやってるわけやから、これからの時代はもう先が見えない時代なんだけど、そこでこそ豊かに生きれるよ。

1. 市長

だからその、今教育長が言っていたと事に追加したいのは、その部分はここで今してきたわけじゃない。だから、そのちゃんと積み上げの上で、どう仕上げていきたいと思いますかというところをちゃんとやってねってことを言ってるわけです。

その上で、これたたきがありますし、今これを基づいてやるしかないんで、とりあえず今まで皆さんが出していただいた意見を集約すると、四つに大きく大別されるんじゃないかなということなんですけど、この辺はいかがでしょう。もしご意見あれば。

1. 西畑委員

この通りだと思います。大体、私が言いたいところというのは、言葉を変えて書いていただいている。

1. 市長

で、それぞれの、その自己肯定感のカテゴリの中にもうちよつと噛み砕くとかいうことですかという要素ですね。

それに対して個別に、こういったものを作っていくってたりもするんですけど

ど、どうでしょう。大体、今までの説明のところ、違和感とか感じられるところ。

1. 末浪委員

単語で言うと、あの前回からずっと出ているのは、コミュニケーションとコラボレーションかっていう、なんかそのところ。コラボレーションっていう言葉がずっと出てたなというふうに思うので、これが人との交流なのか、それともコラボレーションっていう言葉を使うのか。他者を受け入れるところとのコラボレーションっていう言葉を入れるのか。だからそのコミュニケーション力とコラボレーション力っていうのがメモにも残っていて、何回かそれが大事だな、つけさせたいなっていうのが皆さんから出てて、私も言ったと思いますし、市長も出たなと思いますので、その言葉をやっぱりちょっと残したい気もするなと思いました。

1. 市長

ちなみにそのコラボレーション力をどう捉えるかっていうところが、この下のここについてある事例との間でも重要なところだと思うんですけど。みんなが組み体操、みんなですっかり成立してみたいなもの、多分コラボレーション力だというふうに思ってる部分があると思うんです。

それに対して、要は集団に合わせろっていうタイプのコラボレーション力ではなく、ちゃんと個々っていうものがある中で、それぞれの子が協力できるようっていう。だから、その違いがどこにあるのかっていうことを多分最もその教育現場との間でその共有できるかどうかっていう、同じ言葉だとしても、そこからその導き出すものが全然違う場合がある。ちなみにこの週末に昭和女子大学というところで、私と教育長がほっとステーションについて話をした時に、結構東京だったり埼玉の都道府県レベルの指導主事さんが来られたりとか、あるいは関東の私立の方がいらっしゃったんですけど、同じように、なんであんなに行進を見栄にこだわるのか理解できないみたいな、そういう言葉が出てたりして。だから、その組織、団体に合わせろっていう意味でのコラボレーション力では多分おっしゃったのは違いますよね。

1. 末浪委員

これ自体がもうここに向けての、ここにつけさせたい、社会に出ていくために身につけたい力なんで、ここが個と個が世の中出た時に自分に見合った、これをするのに、この力が必要っていう、そのコラボレートできる、その力のことを言ってます。

1. 市長

主幹どうですか。今の部分。

1. 教育総合センター主幹

はい。やっぱりこの、コラボレーションっていうところが、役割、他者同士の やっぱり理解っていうことをすごく深め合った状態で、成し遂げるっていうことが出てくるので、なので内面と内面のコラボレーションっていうところ。

1. 市長

要は同質性を高めて、その同質性の高いもんが組織として動くところに合わせろみたいなことではなくて、ちゃんとそれぞれがあるんだけれども、そこがコミュニケーションを取りながら一緒に何かしらの目標を達成できるだとか、あるいは一緒に何かしらを協力しながら一人ではできないことを成し遂げようと、こういうような話。

1. 教育総合センター主幹

そうです。

1. 西畑委員

その助けてもらう経験っていうのが、それに近いのかなってちょっと思ったんですけど。

1. 市長

通じるでしょうね。

1. 末浪委員

それはそう。こちら側の解釈度合やなっていうふうに思ってしまうのですけど。

1. 市長

いやいやだから、その協力できるっていうこと背景には助けてもらう経験、それは助けることもあれば助けられることもあったりとかっていうような部分があって、そういうことを意識して、そのいろんな行事だったりなんだったりが組み立てられている。決して来賓であったりとか、保護者だったり、「今年も揃ってる、よくやった」みたいな感じで、その全体としての評価を高める

っていうためではないんだと。

やはり、いろんな取り組みがあっても、こういうようなことを意識してやっ
ていくって言うようなことになってますかっていう。そこのなんというかな、
発想をどこに持っていくかというようにところを伝えていきたいというのが、
藪内課長そういう趣旨でいいのかな。

1. まなび推進課長

そうですね。

1. 教育長

さっき教育長室で言われた、この子はこの子と組んだら、よりいいものが発
揮できるというコラボですよね。その時にあの合田次長さんの文章にあった
んだけど、他者との違いを楽しめる見方、そしてその違いを尊重できる見方。
そしてそれに力を合わせる、つながれることを生きがいや、やりがいと捉えら
れる。そういう力って言うのが、今言ってる「質の違う同質」じゃないかなと
思います。そういうことが、自分とは違う人とのコラボレーションかなと。

みんなと同じじゃなかったらあかんから、力を合わせるより、違うから力を
合わせて。前も言われていたように、ものを作るのがものすごい得意やけど、
人とコミュニケーションを取ってつながるのは苦手な子と、それは苦手やけど、
人とつながってそれを販売するのが得意な人がコラボして、なんとビジネスを
展開できる世の中になったんだっていうことを聞いたことがあるんだけど。そ
ういう質の違うもの同士が尊重し合って、新しいものを生み出していける面白
さや、逆に言うと豊かさが発揮できる時代になってきたんだという捉え方。大
変な時代じゃなくって、そういう豊かな時代になっていく。

1. 市長

そういう今出たワードをここにあるものの書き下しとして、もうちょっと出
てきたらいいんじゃないですか。

多分、多様性っていうところにもつながっていくのだと思うんですけど、
主に多様性を認めるべきか認めないべきかということを経験の先生方に問う
た場合、多様性を認めましょうということは総論賛成だと思うんですよ。そ
んなものは社会の蛾だとか、そんなこと言ってたら集団の力が弱められると
か、そんな戦前みたいなこと言う人は多分いないにも関わらず、現場のやっ
てるのがこの多様性を認めることっていうのと、必ずしも合っていないじゃ
ないのって言うところはどこなんだ。だから多様性が認められるとはどうい
うことですか。

そこからどういったことができるようになるんですかみたいところで、今も教育長と西畑さんの話みたいなのは出てくるんじゃないかなと思いますね。

だからちょっとその一枚だったり、その二枚の紙にまとめようとしすぎると、やっぱりその辺の関係がわかんないから、まずはちょっとあまり整理しすぎずに、今まで出た言葉っていうことだったり、その言葉だけが出ても、それぞれの読み取り方が違うみたいなことが往々にして起きますから、全部の部分を含めて、読み解いていきましょう。

1. 教育長

あとね、さっき市長がおっしゃってた、あの軍隊が集団行動って。みんな善意があって、集団でやらないといけないという。学校の教師間違えますでしょ。だからこういうことを集団で育てるんだよということを心にストンと押して集団作りやったらね、そういう集団作りはならないと思います。同じ集団作りでも。

同じ集団活動でもこういうことを留意してやった集団作りは、どんな豊かな集団になるかっていうようなことを、上げられたら、今まで作ってきた集団づくりとは違うけども、こんな豊かな集団づくりができるのかっていうのができますよっていうのはここに挙げられたらどうかと思います。

それは、ひいて言えば、こんな豊かな学校づくりであったり地域づくりにつながるよということで、今学校が抱えている、不登校の問題であったりね、そんなことにも寄与できるような、居場所があるような地域であったりですね、そこにつながっていけるように思うので、ここが重点とした集団づくりはどんな集団づくり、集団の生活に結びついているのかというのを挙げていったらどうかかなと思って。どうでしょうか。

1. 市長

だから、あれですよ。こういう議論をしたり、「個が」とかって話をすると、じゃあもう明々勝手にやらせればいいんですかみたいな、極論を言い始める人だったり、じゃ、もう個別指導しろっていうんですかっていう話であったり、もうそれだったらもう山のように人員を増やして、もう小規模にもっと、少人数でやらせてもらわないと、とても無理ですみたいな、こういう議論になってしまうと思うんです。

だから、集団っていうものを否定してるわけではないんだけど、鋳型に当てはめるような形での、その集団作りということではなく、それぞれの個人につけたい力というのはこういうものであって、それが共生しながら作ってい

る空間というものをどういうふうに大事にしていくんでしょうか。

だから、そこにおいてこそ、もっとそういったことが学べるんですっていうような形で、いろんな角度からそれを多分言わないと伝わらないと思いますね。例えば、ちょっとわかりづらいかもしれませんが多分、聖書とかコーランとかも言ってる内容をまとめたらめっちゃ短くなるんです。

なんだけど、それだけ言ったら伝わらないから、だからいろんな角度から、いろんな部分から、もう、噛み砕いて噛み砕いて噛み砕いて、それでも、ようわからんようだから、わざわざ手紙にしたためたなんとか信者への手紙みたいなのが、また一緒にとついていって。

それを全体通して見ると、こういうことを言いたかったんだなということがわかるようになってる。だから、今回の我々の話ではだいぶその従来も無視してたわけじゃないけれども、相当在り方についてちょっと考え直そうよということを提起してるわけなんで。

だから言いたかったのは、いきなりこれを持ってきても否定もされないけども、何を伝えたいのかっていうことが伝わらない恐れが高い。で、こっちの紙を作っていたいただいたこと、私決して否定しないんです。それができた状態において、今それぞれ周辺でやろうとしていることも、今伝えたかった大事にしたい部分にこんな風な効果があるもんですと。

だから、「こんなまた新しいのが増えてきてめんどさい。」みたいなことじゃなくて、これをいかに、こちら側でつけたい力っていう部分にうまく取り入れて利活用していきましょうっていう、そういう部分だと思います。ただ、まずはこっちの部分について書き下した部分をちゃんと共有できる形にならないと。なぜこれが出てきたか、という流れですね。ストーリーです。その同じ言葉であったとしても、ここではだからずっと一緒に議論してきているから、そんなに極端にずれないけれどもっていう。

1. 吉田委員

この表にはその学力、体力ないんですけどね。学力、体力を高めていくために一番基礎となるものが心構えということが我々の見方ですよ。

そういう意味では、そういうところを基礎において、大綱を作っていくという事はいいと思うんです。決して国や県の大綱ではなくて市ですから、よりその末端の先生方と児童生徒との、そのポイントに焦点を当てるのもすごくいいと思います。

1. 市長

でも、今すごく重要な指摘をいただいたと思います。私がタウミーティング

に行って、いろいろお話をする中で、この間から話をしていますけど、こういった力を付けたいみたいなことを言ったときに、でもそれいいんですけど。勉強しに来る場所でしょ。もっと学力しっかりつけさせてくださいよみたいなことをおっしゃるご家庭もある。

だから、こういう部分に焦点を当てて大綱を作るってのが、もう天理は、そのいわゆる試験だったり、通用するような学力や体力だったり、をどうでもいいと考えているのかみたいに捉えられると、それはきっと違うという部分だと思います。

まずこれをしっかりやった上で、その学力的な部分もそれは大綱ですから、どうやっていくのかっていうところは盛り込まないといけないし。ただ、これだ進路が違ってきている中で、その画一的にとにかく板書をさせるみたいな形の授業が成立してるのかということ、厳しくなってくる。

だから、その辺の授業のあり方についても、実はこの次の段階でやっぱりちゃんとやらないとダメだと思うんですよね。じゃあ、この大綱を見た上で、じゃあ、算数、国語、理科、社会、一体どういうふうに授業しろって言うんですかとなった時に、そんなことはまずいいということではないですよ。どうですか。

1. 西畑委員

いや、それはまさに、もう何年も何年も前からの話ですけど、前の大綱、その前の大綱の時から言って、自己肯定感を高めないと学力が上がらないということが分かったねっていう話で、じゃあ、自己肯定感を高めるには、どうしたらいいのっていうのが、積み重ねて話がこの間から出たので、これはつながってると思ってます。

まず、これがあってっていうので、その結果こういう効果があるよっていう、さっき集団としてどうというお話もありましたけど、そういうふうな期待される効果っていうのがもう出てると思うんですよ。

1. 市長

いや、その授業だったりの組み立て方においても、これを意識したような形であったりとか、あるいは習熟モードが、どれだけ出来るかというところまでは見えてないですけど。

1. 教育長

学校によってはちょっとずつ教科と学年を限定して取り組んでくれていますけどね。

1. 末浪委員

これ木で例えると、その木の幹の部分みたいな、葉っぱの部分かな、わかんないけど、そういう部分は散々以前の教育大綱でやっているという。

1. 市長

これはだから根っこに近い部分ですね、どっちかというところ。

1. 末浪委員

これは根っこに近いです。その根っこの部分を、じゃあどれだけ太くするか、強くするか、枯れなくするか。環境や土がちょっと悪くても、水が少々来なくても、じゃあどれだけできるかというところをつけさせたい部分に、今回は特化したってというような教育大綱になると思うんですよね。

その上にあるものは、以前のもも持ってきてもいいと思うんですけど、そういう形で、この五年間は教育大綱はちょっと根っこを太く強くするために特化して取り組みますっていう形で言い切ってもいいんじゃないかなと思います。

1. 吉田委員

天理市としては、国は知・徳・体と言いますが、並べるんじゃないで、やはり心の部分がやっぱり根っこにあるという、そういう捉え方で明文化された方がいいことかなと思います。これを基に大綱はアクションプランを整理されたものに、こういうものを育てたいというものを、組み込んでいく。

その上さらに、もっと技術的な事としてこの二点があると思います。

1. 市長

私は、その根っこが本当に大事っていう部分なんですけど、その根っこと幹が喧嘩しちゃダメだと思ってるんですよ。なんだかんだ言ったって、でもこういう風な根っこを大事にしろって言われても、ずっと、総合学習の時間ですみたいなんだり、フリースクールみたいな形だったら、先生方これでやれると思うんですよ。

だけど現実には、国の定めるカリキュラムに基づいて、これだけやれっていうものが来ていて、それをしっかり着実に授業としてやっていかなかったら、なんでやってくれないんですかとかいう風に言われてしまうという部分があると。

だから、これを議論して、今年度のやっぱり下半期においてですね、その幹

と根が喧嘩しない形での、それぞれ国語だったり算数だったりって、その学力の部分での授業のあり方っていうのがどういうものなんだっていう部分も、もう少し踏み込んでいかないと、多分その作っていく際にはしんどいんじゃないかなと思う。

だから、昨日ほっとステーションでもだいぶ議論していたんです。教室から出てしまう子で、居場所を作って話をして、戻っていくということなんですけれども。そもそもが、つまらないと。わからないみたいな。あるいはもうとっくの昔にやってて、つまらない。それ両方のパターンがあるでしょう。

だから、その学校でSOSを聞ける体制を作った。居場所ができたらちょっと落ち着けるようになった。でも結局戻っていく先がその授業のその教科の勉強なんだとしたら、そこがつまらないままだったりとか、自分に明らかに合わないままだったとしたら、それ学校にいる時間がハッピーと言えるのかどうかっていう。

だからそういう意味において、いきなり来年度から全てを実現できるわけではないかもしれないけれども、その授業強化についてもどういったことを目指すのかっていう部分を真剣に掘り下げないと、これ根っこだけが空回りしちゃわないかっていう懸念を持ってるんですが、どうでしょう。

1. 吉田委員

心が学びたいという気持ちがなければ絶対いけない。ある児童の話なんですけど、漢字が覚えられない。だけど友達の名前、バス停の名前、地区の名前、そういうものを教えると、練習するとそれを覚えていくということもあります。

また、体力についてもね、筋力トレーニングするのに、課題をこなすだけの筋力トレーニングじゃなくて、強くなりたい、ここを強くしたいという気持ちを持ってトレーニングをすると力がつく。

1. 市長

それは前の時にもおっしゃっていたことが、それぞれの自己ベストをどう引き出してあげるかみたいな部分でもそういう意味では役に立つ。

1. 吉田委員

心が体力を作る。心が学力を作るというものがあると思うんですね。だからさっきのバス停や地名や友達の名前を覚えられる。漢字で覚えられる。だけど漢字を順番に覚えられない。やはり自分の気持ちに近いところにあるものが覚えられる。

体力についても、自分が向上心を持っていれば、それが身についていくというものですから。授業というのは子どものやる気を引き出す工夫というのが大事です。先ほど市長がおっしゃったように、板書をノートに写す。先生が次のことをおっしゃってた。だから先生がおっしゃってることの三十秒前の内容を写してるわけですね。しかし授業は整然としている。私たち、学校視察へ行った時に大概そういう授業を見てきたんですよ。なぜそうなんですかって言ったら、校長先生は普段は元気に子どもたちが行き交う授業してるんだけど、視察となるとみんなこのような授業になるんですよというようなことを校長先生がおっしゃってましたけども、やっぱり授業の形を変えていく。その一時間何にも喋らずに終わってしまう。もっと言えば、六時間、一日、何にも授業中に喋らずに一日過ごす子もいますからね。

やっぱりそういうのもなくし、一人一人がまさに、ここに書いてあるように、失敗しても許される。なんでも自発的に行動していくという、こういう指導の在り方を身につけて、授業に臨む。それに対して、より効果的な授業を作れる先生だったら。

1. 教育長

これを大事にした集団作りはどんな集団になるかと思っっているように、これを大事にした授業づくりはどんな学びを作るのかということを表にしていかなければ。

1. 市長

それがないとだめですね。

1. 西畑委員

これは子どもに対してつきたい力でもありますけど。そこのために、先生はどんな力を付けないといけないのかとか。

1. 市長

そっちもあるでしょう。それはちょっとあれかな。こういうことを意識してどういう授業を作るべきかっていうところをやった上で、それが可能になるために必要なスキルはって、これまた掘り込んだ部分で。

それが今後の研修の在り方だったりするのかなと思いますけれども。

1. 西畑委員

もう一つ、これは子ども、子ども、子どもと言ってるんですけど、教育大綱

って社会教育も含むので、地域の大人が身につける力っていうのも必要じゃないですか。

1. 市長

なるほど。ちょっとそこまでいけるかはあれですけども。地域の皆さんの中でもこういうものが実はすごくまちまちで、だから共助のできる支え合いの社会だみたいなことを言って、既にうまくいってないみたいな部分があるとするならば、また同じように集団で集めて強制的に授業を受けさせるってことはないかもしれないけれども、三部制の中でこういう取り組みをやっていく中で、大人、あるいは高齢者も、要はずっと学び続けるということの中に、こういうようなところが一緒につけていけるんですっていう、そういう解きほぐし方はいけるんじゃないかなと。

1. 教育長

子どもがこれを伸ばしていく時にね、一緒に例えば三部制でやってる中でこういう力が伸びていくと思うんですよ。子どもの姿を通して、大人もそういう力も豊かにしていくんだと。

1. 市長

そこで今、いろんなレイヤーの話が一緒になったので整理をすると、その学びっていうことについて、学習授業の作り方、子どもにとってのという部分は、これはちゃんとやっぱり掘り下げないといけない。

それこそが本当はうちの指導主事の皆さんが最も議論しながら、各学校の先生とディスカッションしないといけない部分だと。だからそれを議論するためにはですね。例えば、じゃあ塾ってのはどういうものなんですか。どういうものですか。塾や学習塾や進学塾。

1. まなび推進課長

受験に合格するためのスキル、またはそれに向けた学力も含めてですけども。

1. 市長

なんで受験に合格する必要があるんですか。

1. まなび推進課長

その学校に行きたいという。

1. 市長

その学校に行けたら何が待ってる。

1. まなび推進課長

その子が描く楽しい学校生活。

1. 市長

だから親の側に漠然と、やっぱり偏差値、世の中の認知度、あるいはその評価が高い学校に行けば、より選択肢が多くなり、そうするとやっぱり生涯年収だったり、経済的な面でもそれがつながってくるんじゃないかという期待感があり、ゆえにそこにしっかり行けるようにするためのその学力というか、試験を突破するための能力というのはつけさせてもらえる。

それを完全に習熟度でやってる。私が行っていたとある塾だったら、S、H、ABってある中で、Sだけで教室が多いところだった。7クラスぐらい。徹底した習熟度。その中で、その切磋琢磨させ、いかにこの突破する力をつけていくか。それと同じことは出来ないですよ。

だけど、学力を付ける場であるということになっていく。そうやったときに、どういったって。しかも全ての人が塾に行かせて、じゃあ塾に行かせられる人だけが、その将来的にはいろんなチャンスを得られるんですかという、もうほとんど今やそんなきれいごとになりつつありますが、本来はそうじゃないはずですよ。

本来は、その学校というところでちゃんと学習をし、そこでしっかりやっていければ。

1. 教育長

私はね、塾でもいいと思うんですよ。野球でも武道でもいいと思う。それを通してこういう力を育めたら、その学んだことが社会へ出た時にきっと力になるんだけど。

1. 市長

でもね、申し訳ないけどね、じゃあ学問の授業を全部やめて、柔道がやりたいから柔道教室へ行って、ひたすらやりましょうってならないでしょ。

授業があるわけですよ。引き続き。授業があり続けるということの中で、一方で塾みたいな存在があるときに、学校における学問だったり、授業の作り方っていうことに、どういうその目的意識を持って授業に取り組んでいくんです

かっていう部分がなければ、やっぱり試験をやり、課題を出し、板書をきちんと書いてることを評価してという部分は根本的に変わらないから。だから我々がこんなにいろんな力と言っても、いや、ずれてるんだけど、授業にいる間は面白くないんだけど。だって先生と会話してる時間と授業聞いている時間とだったら、学校にいる時間の中でどれだけのバランスですか。

1. 教育長

僕はね、楽しい学びとかね、多様な学びの機会とかね、これを大事にしてたら、形式的な一斉授業もやめて。

1. 市長

いや、ふわっとしすぎてる。それはね、「キリスト教とは何だ」って「愛」みたいな。それね、申し訳ないけど、長嶋が昔、指導する時に、こう来たらブンと振ったらバーンと当たってみたいな。

いや、間違っていないんだけど、ブンと降ったらバーンと当たって飛ぶみたいなことを言われたって、それで授業を作りだったり、みんなの意識っていうところはどう作れますかって話。楽しい学びって何ですか。だから、学びの楽しさをそれぞれの子が感じられる授業づくりみたいな。多分そこまでは、いくはずなんです。

なのに現実にやっていることはだいぶ違うとなった場合に、それだけいろんなその学力だっったりの度合いが違う児童がいっぱいいる中での算数なら算数、国語なら国語の学びの楽しさっていうのは、どうやって作っていったらいいんだみたいなことを、結論が全部書いてないにしても、問題提起ぐらいはしておかないと上滑っちゃう。

ええことは言っとんねんけど、「俺らにどう授業しろって言うんだ」となってしまう。

1. 教育長

だから、一斉授業ありきじゃなくて、こういうことを追求していった授業を。

1. 市長

それの中でさっき言った、その典型的にはその板書です。ひたすら板書みたいなとか、あるいはその本当に体を動かすことの楽しさとか、目的意識がないんだけど、とりあえず言うたまんまやっておけば、体力つくみたいな感じのタイプだとか。そういうことではないでしょうっていうところを、まずしっかり示した上で、じゃあ理科だったらどういうことをやるんですか。算数だったら

どういふことをやるんですかっていうことを、みんながそこを起点に議論できるような形じゃないと、ビューと来たら、ブンと振ってバーンと当たってビューンって飛んでいくみたい。そうなのちゃうわけよ。言ってること分かりますか。

1. 末浪委員

これは、塾とかが詰め込み教育とか板書の教育とか、そういう方であれば、どちらかというところ、この学校教育の方は、そうじゃない方に振り切ったような授業の形態を取りたいってなると、教育委員では共有したことあるんですけども、学び合いていうのをされている佐賀市立東与賀中学校のその勉強の仕方。これはテレビ放送で拝見したんですけど、その入りは不登校がなくなったってところの入り方だったんですね。

だから、その学び合いていう授業を実践したら、不登校者がいなくなった。なぜなら学校に来るのが楽しいから。

1. 市長

学び合いはどんなスタイルの学び合い。

1. 末浪委員

一応授業の前にルールみたいな、そんなのも、もちろんありつつ今回の授業の課題を教師が定義して、どうぞという形で、あとは子どもたちに、立ち歩き推奨で、いろんな形でその学びを友達としてもいいし、一人で調べてもいいし、隣のクラスに行ってもいいしみたい。そういう形で。最後はその発表、評価っていうのがある。

1. 市長

理科とかやりやすい気がするんですけど、算数とか漢字を覚えるとかってどうやったらいい。

1. 末浪委員

だから、そういうところを訊ねてみるのに、視察に行かれて聞かれてもいいと思います。

1. 教育長

二階堂小学校と櫛本小学校は学び合いを何年も研究して追求してますね。

1. 市長

私が時々疑問に思ったのが、できる子ができない子に教えるみたいな事があるじゃないですか。あれはどうなんだろうっていうちょっと疑問があって。単に生徒の間でマウントを取り合ってしまう形になるんじゃないかなと。

1. 教育長

教え合いではなくて、聞き合いというんです。学び合いというのは、わからない子が教えてって、ここをどうって聞いてくるんです。

だから、できる子がしゃかりきになってリーダーをしないで、わからない子がここをどう教えてって言うて、やっていくと。

1. 末浪委員

そういうのも最初の、セットアップがあればいいと思いますし、教師のファシリテート具合だと思うんですけども。

そういうので、全授業がそれにしなくてもいいと思うんですよ。でも、1日に何個か授業があって、例えば、理科だったらできるってなって、理科をするとしても、毎回理科の授業を全部それってしなくてもいいと思います。

そういうのをフレキシブルに組み合わせたらいいと思います。

1. 教育長

だから櫛本小学校ね、今も不登校ゼロって言ってます。不登校ゼロでもそれが、北中学校に行ったら増えるんだったら意味ないやろって。

1. 末浪委員

私、何か言いたいかというのと、私立の学校がやってるんじゃないかと、公立の中学校がやっているの、そういうのは全然できるんじゃないかなというふうには思ってます。

1. 西畑委員

誰かと一緒にやるっていうことが大事なんだと思うんですよね。一緒に何かをするということで、自分だけの世界だけじゃない。それが学び合いというやつだと思うんですけど。学力、公教育で求める学力って何なのって言ったら、共通の認識ってことですよ。

1. 市長

例えばその漢字だったら、小学校のうちに何字を教えることになってるんで

すか。

1. まなび推進課長

1040から1050字だと思います。

1. 市長

中学校になったら何単語みたいな。ところが、それをとにかく同じペースで同じようにやれっていう中で、それをほぼほぼ修得出来たという子もいれば、もう途中で全然わからない、今さら聞けないっていう子も居る中で、もうほとんど身につかないまま時間だけが過ぎていった。

こういう形にならないように、工夫をするにはどうしたらいいんだとか、それが、できる子にとってもね、逆にそれであるならば、他の勉強以外のいろんな体験だったり、価値の中でいろんなものさしというのを持てるように指導が出来たり。

今日の会話を全部文章に作ろうとしないで、大綱の構成を作りましょう。こういう順番の構成を作る。ここにこういう今までの議論のこういうこの部分の内容を入れていって、こういう形の筋立てにしていく。

で、それをちゃんとみんなで見た上で、今までの議論が反映されているかとかで肉付けしたり、ちょっと今の学習面の部分については今日いきなり話をしたところですから、調べてみたらみたいな提案をいただいた中で、こんな工夫ができるんじゃないかみたいな事例も引いてくれればいいです。

吉田委員いかがですか。

1. 吉田委員

学びの共同体というのはすごくいいと思います。こんな時はどうする。こういう時はこういう形です。というのは、セットなわけです。新しい事に取り組みにくい状況であっても、やり方が決められていて、また守るべきことも決められていて、それをやればいいんだけど、なかなかそれをみんなでやろうという学校体制を作るのが難しい。あれをみてたら、すごいと思いますよ。柳本も今始めてる学びの共同体。

1. 教育長

日本で第一人者の一人、佐藤学さんとおっしゃる方を、毎年呼んだんです樺本は。3年間で学びの共同体をここまでやったのは、全国で初めてだというお褒めの言葉をいただいて。

1. 市長

その辺のものが有効展開できるかとか、ちょっと解き解す部分ってのもいると思います。

でもそこが全然なくて、多分これとこれだと間が抜けてるってなる。言ってる事わかります。先生方のやっぱりメインのミッションの部分についてどういうふうに捉えるのですかというのがなかったら。根っこと葉みたいなの。どっちもいるんだよ。どっちもいるんだけど、幹と枝がいる。幼児部門はこういう議論をもとに今やってる小学生までに、その日々の本当にその保育と教育をもう分けない。だってもうこども園っていう形で一緒にやっていますので。

だから、幼児期の小学校に出るまでに身につけたい力っていう部分をどう組み立てていくかを議論する。そんなとうてい今の議論だけで12月にいきなりパブリックコメントっていうのは無理だと思うので、ちょっと11月にもう一度機会をいただいて、ちょっとそれまでに流れをつけさせていただいたら。

まず一番最初にもう目次を、目次のレベルでいい。構成、こういう形、こういう形でストーリーをやっていって、いろんな角度で伝えていって。

だからそれはやっぱり指導者としてしんどい。共通理解が成立していると、それでわかるけど。ちょっとぜひ追加でコメントをいただきたい。それでも一遍、ちょっと大綱の形になるように整理を11月にして、12月に向かっていきましょう。

1. 教育総務課長

ちょっと12月のパブリックコメントという部分につきましてね、公表紙の方には載せる方向で話を進めていますので、目標としてはもう11月中にある程度のレイアウトを固めて、確認作業まで進めたいというところがございしますので、まだ引き続き日程調整もさせていただいて、それでもし時間が足りないようでしたら、もうちょっとある程度クラスルームでの情報共有をしながら進めていくしかないかなと。

1. 市長

皆さんがパブリックコメントっていうのを誤解してるのは、パブリックコメントっていうのはもう一言一句変えちゃいけないぐらいの完成度の状態で、誰からも特に文句がありませんでしたから、これで行くことにしますというような感覚なわけです。本来のパブリックコメントっていうのは、そこでいろんな人の意見が入って、そこから変わりうるんですから。

だから、その大元の一番大事にしてる部分についてきちんと示して、それに対してあれがあるのであれば、例えばそこから先に書いてあるこの本当のア

クションプランの部分が例えば追加をされたとか、その詳細がどうかなみた
いなことってというのは、あとで追加しましたというのも全然構わないし。

この教育大綱は、国に出さないといけないわけでもないわけでしょ。だから、
もし間に合いきらなかったら、5年に一回であったとしても、まずこの根と幹
ぐらいはちゃんと大綱として示した中で、それをかみ砕いていってどうなんで
しょうということとは、別に、そこからその補足資料として来年度以降どんど
ん足していけばいいんですよ。

だから形の上でこんなものを作って、パブリックコメントで承認いただいて、
これで完成で、5年間ほったらかして埃積もってましたっていうんじゃなくて、
それに基づいて普段に大綱というのは、ディスカッションをしていくから意味
がある。

1. まなび推進課長

議論をしながら、変わりうるような教育大綱に変えていったらいいですね。

1. 市長

いや、だからそれが元になって、この5年間、みんながいろんなことを議論
しながら授業を作っていくましようということをやればいいんですよ。

だからね、法律とか条例を作るのといっしょくたにしてませんか。これは
日々のその学校だったり、園・所の中でどう活かしていくのかっていう基本認
識をみんなで共有しようとしているものが大綱じゃないの。だから、今我々が
作ろうとした基本認識合わせなのよ。

具体的にどうやったらいいかなという話は、そこから普段に試行錯誤が
行われるわけです。じゃあ場合によっては試行錯誤しているうちに、やっぱり
ちょっとこの書き方では誤解があると。あるいはちょっと前衛的過ぎたと。こ
れがいいと思ってたけども、ちょっと世の中のだいぶ三歩先ぐらいをやり過ぎ
てしまって、ギャップが激しすぎてうまくいかなかったとか、そういうことだ
って十分あり得るわけですから。もっと気楽にやったらいいんじゃないですか。

それよりも今大切なことは、ひたすら板書をしながら、たるんでるみたいな
人にも、その人の正義がある。それぞれが自分の正義を掲げる。俺はこうやっ
てうまく教室クラスをまとめてきたってことを言う。

だから職員会議をやってもやっぱりそういう人がうなると、他の人は違和感
を感じても言えない。そういう状態にそれぞれの現場がならないように、天
理市として大事にしたいことは何ですかという基本認識合わせだと僕は思っ
ているんですけど、違う。

1. まなび推進課長

それがないとやっぱりいい教育ができない。

1. 市長

だから、そんなこと言ったら身も蓋もないんだけど、大綱が出来なかつたらそれで困りますか。それじゃあ作る意味ないんじゃないっていう、あるいはここで散々ディスカッションして、こんなん出来たよっていうのが、とりあえず先生方配られて、また総花的に書いてあって、別に異論があるわけじゃないけどみたいな感じで扱われて、5年間眠ってるだけだったら意味くないですか。だからその本当に理論、あるいは先生方の授業の作り方の本当に土台になるようなものを作ろうと。

1. 教育長

私もこれが根っこで、その幹に三部制があるのか、だから三部制があるのかって思います。

1. 市長

学力って部分だったらどういう形にするか知らないけれども、これだけ差がある学力度合い。あるいはその子ども自身が受けられるいろんな学校以外の教育に差がある状態において、みんながその学ぶ楽しさを感じられる授業の作り方ってのはどういうものなんだというところを、それはどこまでその習熟度別でやればいいのかとか、あるいは習熟度別っていうことじゃなくて、さっき言ったような、学び合いみたいな形で作ったらいいのか。

1. 教育長

二階堂小学校でも櫛本小学校も、だから何年も前に学び合いを導入したと思いますよ。

1. 市長

それが本当にどういう効果を出しているのかみたいな部分がないと、ほととステーションがどれだけ個別要素を出せる力とかがあってというのが作ってあったとしても、一番のやっぱりメインの部分がつまんらないということじゃ、どうにもならないですね。そのぐらいの気でやってもらったらいいんじゃないですかね。

今年度ね、条例じゃないんだから。法律を作るようにこういう手順を踏んで、こういう形で一言一句変わらない状態で「市民からのお墨付きをもらいまし

た。」みたいな形のものを作るっていうことに囚われてしまうっていうのは、型に当てはめる教育では駄目なんだということを言ってる我々の仕事自体が型に拘束されてるわけじゃないですか。

1. まなび推進課長

はい。そうです。

1. 市長

そういうものとしてやったらいい。はい。ぜひまたいろいろご意見をよろしくお願いします。

ありがとうございます。

終了時間 午後5時37分